

## 昔話の継承と保育実践

矢口 裕 康

succession of folktales and some suggestions about using them in kindergarten teaching

YAGUCHI Hiroyasu

キーワード：昔話素材 継承 絵本 保育実践 語り聴かせ

**概要：**昔話の継承と保育実践を、大きく三つの観点から具体化した。

現在の教育事情から

- (1) 2011年4月から実施されている新学習指導要領「国語科」1、2年で、昔話・神話を取り上げるようになった今と言う時代を踏まえ、今後の保育実践はどうあるべきか。

2011年度授業から

- (2) \* 1年生「伝承文学と民話」の授業を通して保育実践力を養う試み  
 ○言葉遊び「回文」から考えたこと  
 ○イソップ「うさぎとかめ」後日譚「亀に負けた兎」のその後の展開を作った  
 \* 2年生「保育内容指導法・言葉」の授業を通して保育実践力を養う試み  
 ○「三匹の子ぶた」をめぐって  
 ○五味太郎・色の絵本6冊から「あおの絵本」を作った
- (3) 共通語で書かれた坪田譲治昔話を再評価し、今後の保育実践へとつなげる提案の三点である。

### 1. 学生の感性を磨く

絵本は「絵と文」で成立する文学である。ゆえにその総合力が、作品の評価につながる。

絵本の読みとり方として、文はもちろんだが〈絵〉を読み取ることを学生に勧めている。ある学生が『くだものだもの』（石津ひろ・文 山村浩二・絵）を、6か所読み取ってくれた。

〈『くだものだもの』では、(1)まさかのすいかは「いけない」発言!!そして、(2)キウイやブルーベリーの浮きわは、切り口のようになっていてこってるなど思いました。(3)バナナのナナバンの所では次のミカンの手とカメさんが見えていて、気になる所でした。あと、(4)びわさんも、けっこう前から走っていてどうなるかと思いきや、くりと衝突!そしてあやまりが全然おわらないのはおもしろかったです。(5)最後に、スイカは来ていてごっくんして終わる所良かったです。しかも(6)さいごのページにいたくだものはスイカさん家に行って

いたくだものでしたよね!?)

\* (1)~(6)は筆者による。

子ども教育学科に入学して二カ月余り、5月26日の授業記録に書いてくれた絵本感想である。

どの授業でも毎回一冊は絵本・紙芝居を語っている。学生には授業最後に〈授業記録〉を書いてもらい、私なりに読み込み、コメントも書き入れている。

学生は感想として、  
 〈みんなの感想は私の発想とやっぱりちがうのできけると新しい考えができるのでいいですね〉と記してくれた。それに対して私から一言、  
 〈47人+私とHさんの90分・空間を大切にしていこうね。〉

と記し、授業記録を本人に返した。

授業導入にこのプリントは読ませてもらった。他の学生にも、このような視点も絵本を読み取る上で広げていってほしいと思っている。

また授業内での私の語り聴かせに対し、次のような感想をもらった。

〈いつも思っていることではありますが、矢口先生の語りの調子はかなり独特のものだと思います。自分としても、自分なりの口調は持っていると思うので、“自分なりの語感”“自分なりの表字”というものをみがきあげていければと思います。『おかしなおかし』も『くだものだもの』も共通して面白く、心地良いリズムなのは『おやおや、おやさい』と同じだと思います。私個人としても、『くだものだもの』の、海水浴を断ったスイカが最後に現れる所がツボでした〉

私の一言は、  
〈ツボだね、うまくここまできき手をひっぱってゆく語りとしたいものですね〉と記した。

学生の絵本読みを通して、授業では語り聴かせのコツを一緒に発見したいものである。

授業記録を通してのこのような会話が、保育実践につながり、かつ昔話を学生自身が継承することにつながるはずである。

## 2. 授業を通しての保育実践力養成

### (1) 1年生「伝承文学と民話」から

2011年11月25日「朝日川柳」に、「だんしがしんだ洒落じゃなくなった」が入選していた。

ここにいうだんしは、立川談志である。そしてこの川柳には回文が織り込まれていた。「だんしがしんだ」が回文である。回文とは、上から読んでも下から読んでも同じ文のことである。「談志が死んだ」2011年11月21日を踏まえての川柳である。

「伝承文学と民話」の授業では、毎回伝統文化の一つである“なぞなぞなあーに”を解くことも取り入れている。

例えばこのような謎謎である。  
〈入用な時は吐き出して、いらぬ時のみ込むものなあーに (イスラエル)  
口から出して耳から呑み込むものなあーに (フィンランド)〉

まず学生それぞれに答えてもらう。そしておもむろに解答を明らかにする。この学生との呼吸

で、授業はもう一つ盛り上がる。

答えは「言葉」である。日本人である私達が、イスラエル・フィンランドの人達が伝えている謎謎なあーにを、理解できるという面白みも感じてもらえる次第である。

言葉遊びを取り入れた絵本を検討した所から、「回文」を作ってみようとして授業を展開させてみた。

#### 1年生の「回文」

〈しんぶんし (2人) たしかしんぶんしかしたすいす (スイス) お (押) すいす せかいをいかせ さかさかさ みこしのしこみ だんすがすんだ やいたたいや ゆのみのゆ おかねでねか (買) お るすになにする きすがすき かいあいか (人の名前・2人) さくのなかのカナのくさ サエのえさ まさこさま (人の名前) えりまきマリエ すなのなす たけやぶやけた (4人) くるみとみるく にわとりとわに みのむしおしむのみ りすのすりりすがすり かた (語) るたか かもめのもめかかおのおか よだれだよ なかのなんなのかなしかのかし かばはばか ばかなかば うままう きつつき (2人) こねこ こねこねこねこ こねるねこ こねこねこ ねこのこね (2人) いるかはかるい (3人) ねくたいたくね いかとかい いかいなくい いかのだんすはすんだのかい いかのかい かいとかい たいいた たいいたたい とまととまと〉

学生一人一人の感性の素晴らしさの一端を見せてもらった。あえてベスト3を上げてみよう。

◆授業は毎回、ネクタイ姿の正装で教室へだが「ネクタイ痛くね」

◆高校時代弓道部から「トマトと的」

◆踊りを習っている「烏賊のダンスはすんだのかい」

だ。

さて2年生の回文も記してみよう。

〈たいがいた さかなのなかさ いかとかい かいとかい (2人) りすがすり かばはばかうまがまう ばんだのだんば せみのみせ きつつきつつき (以下、三点は人名を) ぼくと久保 トールのるーと きみは美紀 ちかいかち そううそ こどもどこ (2人) つまをま

つ いなかのかない いませまい なはのはな  
そばのにわにのぼそ おかしがすきすきすがし  
かお めもかわいいわかめ)

「妻を待つ・田舎の家内・居間狭い」と、かなり渋い回文もある。

自分の考えた回文・みんなの回文を受けとめた上で、

- ・『にわのわに』(多田ヒロシ・作)
  - ・『ぞうからかうぞ』(石津ちひろ・文 藤枝リュウジ・絵)
- も語ってみた。

### 「亀に負けた兎」の後日譚を作った

2011年は卯年であった。ということで、授業前半部分ではブルーナ絵本を語ってみた。その後イソップ「うさぎとかめ」を授業の素材とした。新潟県の昔話に、「うさぎとかめ」の後日譚「亀に負けた兎」がある。その昔話を再話した絵本『まけうさぎ』(斎藤隆介・作 まつやまふみお・絵)も語った上で、その後どのような展開になるかイメージしてもらった。

6人の学生の「亀に負けた兎」後日譚を記してみる。

〈1〉

その後、負けウサギは兎村に戻ってさっきあったことをみんなに話しました。兎村のウサギ達は喜び、とびはね、負けウサギに感謝しました。みんなが喜んでると負けウサギが言いました。「今はもう安全だからいいけど、オオカミさんが元気になったら、また襲ってくるかもしれない」それを聞いた他のウサギ達は困った様子で「どうしよう」と相談し始めました。そこで負けウサギはこう言いました。「今から気絶してるオオカミさんを助けに行こうよ！僕達が仲良く、お互いに助け合えたら幸せに暮らせると思うんだ！」負けウサギの言葉を聞いたウサギ達は最初どうしようかと迷っていましたが、幸せに暮らせるということを聞いてオオカミを助けることを決意して負けウサギの後について行きました。そしてオオカミがいる崖の下に着くと負けウサギが気絶しているオオカミに近寄ってこう言いました。「さっきはごめんね。でもウサギ達を君に渡すことはできないん

だ、僕の大切な仲間だからね。今から君を家まで運ぶから道を教えてくれるかい？」その問いかけにオオカミはオオカミ村までの道を教えました。オオカミ村に着くと他のオオカミたちが出てきて、弱っているオオカミを見て「何てことをしてくれるんだ！」と怒りを顕わにしました。他のオオカミ達がウサギ達に飛びかかろうとした時弱ったオオカミが「やめろ！ウサギ達は俺を助けてくれたんだ！」と一声あげました。その声にオオカミはウサギ達に深いお辞儀をして「有難う」と言いました。そしてそれからはオオカミとウサギは争うことなく、毎日楽しく暮らしました。

学生達は授業時間内に後日譚を完成してくれた。

その中で一番の長編である。自分のイメージしたことを集中し執筆している姿が、今でも目に浮かぶ。

〈2〉

オオカミは谷底に落ちてしまいましたが危うく命は取り留めていました。その時、オオカミが落ちた道の近くを「赤頭巾ちゃん」が通りました。オオカミは赤頭巾に助けてもらい一緒にお婆さんの家に行きました。初めはオオカミもおとなしくしていましたが、徐々に回復して行くとお腹がすいてきたのでオオカミは、お婆さんと赤頭巾が寝ている時を見計らって一気に飲み込んでしまいました。ちょうどそこへ、いつもお婆さん達に優しくしてもらっていたあのオオカミを倒したウサギがやって来て、オオカミの大きなお腹を見てびっくりしました。オオカミも、気持ちよさそうに眠っていたので、そのすきに兎村の仲間と森の動物達をみんな呼んで、オオカミのお腹を切りさばいてしまいました。そして赤頭巾ちゃんもお婆ちゃんも助かり、オオカミはもう目を覚ますことはありませんでした。

「赤頭巾」も参加しての後日譚である。

〈3〉

村から村八分にされたウサギは、見事オオカミ

を倒すことが出来ました。村のウサギ達は、月にいる焼けウサギから亀に負けたウサギがオオカミを倒したことを聞かされました。それでも村のウサギ達は信じる事が出来ずに、びくびくし、子ウサギ三匹を抱いていました。その後何日たってもオオカミからの連絡はなく、一カ月がたちました。村ウサギ達は、オオカミのことを忘れていて、外へ子ウサギを出して遊ばせていました。そんな時、包帯まみれのオオカミが現れました。子ウサギはびっくりしました、足も動きません。そんな時、亀に負けたウサギが登場、そのウサギを見た包帯まみれのオオカミは目を丸くして、逃げに行ったそうです。その姿を見た子ウサギは、亀に負けたウサギになつき、村のウサギは、亀に負けたウサギを、また仲間に入れることにしました。その日以降オオカミは、現れず、みんなで楽しい日々を過ごしました。

「亀に負けた兎」には、教育のテーマの一つにつながる“村八分”も描かれている。

#### 〈4〉

オオカミのいた山（丘）から目を覚ましたウサギが降りてくると仲間のウサギが迎えてくれた。「すごいや！すごいや！」「亀に負けたがオオカミには勝つウサギがいるんやな」とあちこちから歓声があがった！そして、村の偉いウサギが「亀に負けたウサギ、村八分撤回！」と言った。それからウサギは幸せに暮らしましたとさ。・・・一方、崖から落ちたオオカミは、驚くことに生きていた。しかし、ウサギに怒るよりも「やるな…あいつ」と感心したようで兎村には近づかなくなった。

#### 〈5〉

亀に負けたウサギはいったん村からはぶられたけども、オオカミをやっつけて村を救ったということで、英雄として讃えられるようになった。そして時間が流れ村の長（おさ）ウサギが死んでしまった。次の長をどのウサギにするかを話し合った結果、英雄として讃えられているウサギを次の村の長にすることが決まった。昔のウサギだった

ら威張り散らしていたかもしれないが、亀に負けた過去があるので、奢りもせず、快く引き受けた。そして村の政治など何事も慎重に最後まで気を抜かないというそのウサギの精神があったので、その村はいい方向へと発展していった。こうして負けウサギだったウサギは死んでも、なお、次の世代へと語り継がれる伝説のウサギとなったのである。

授業記録は基本的に、授業内提出である。しかし学生からの申し出があれば、翌日提出を認めている。次の後日譚はその一点である。

#### 〈6〉

ウサギはオオカミをやっつけて子ウサギを救って、村に戻ることが出来た。そのころ、一方ウサギに勝った亀は村でてんやわんやの大宴会になっていた。「お前は亀族の誇りだ！なんてったってあのウサギに勝ったんだからな！」“勝ち亀”は今までのろいだの、遅いだの、けなされてばかりだったから、嬉しくって嬉しくってたまらない。最初は「いやいや、ウサギが寝てしまったからだよ」と言っていたが、そのうち自分は足が速いかもしれないと思っていた。親切で優しい亀は動物達に威張るようになっていた。「俺を誰だと思ってやがる、ウサギに勝った亀、勝ち亀だぞ」動物達は何も言わなかった。すると一匹の小さな鼠が小さな声で「亀さんや、亀さんや、そんなに早いと言うならば、私と駆けっこいたしましょう」「なあに、造作もないや、だって俺はウサギに勝ったんだからな！お前なんて牛の上に乗って、楽しんで一番目になった奴じゃないか」駆けっこをまたウサギと同じ場所で始めた。ヨーイドンで走りだしたが、亀は足が思うように動かない。そう亀は、自分は遅いということ忘れていたのだ。「ああ俺はこんなに遅かったけれど、あの時は頑張って、努力したから一番になれたんだ」そう思った時に、牛の背に乗った鼠が後ろからのんびりやってきた。「亀さん、分かってもらえて嬉しいです。さあ、私と一緒に牛さんにゴールまで送ってもらいましょう。駆けっこはおしまいです」この駆けっこで、亀は“勝ち亀”から昔の優しい亀さんに戻

り、動物達とまた仲良く過ごしました。「だって優しい亀さんがみな大好きだからだよ」

「十二支の由来」も織り込んだ後日譚である。

## (2) 2年生「保育内容指導法・言葉」から

### 「三匹の子ぶた」をめぐって

「三匹の子ぶた」を素材に授業を展開した。まずは、学生達の乳幼児期に出会った「三匹の子ぶた」の粗筋を書いてもらった。

#### 〈事例1 女子学生〉

ある所に三匹の子ぶたの兄弟がいました。せっかちな長男と気の強い次男、のんびり屋の三男です。ある日三匹のお母さんは言いました。「この家を出て、それぞれの家を建てて暮らさない」三匹は言われたとおりに家を出て、家を作る材料を探しました。長男は藁の家、次男は木の家、三男はレンガの家を作ることに決めました。長男は近くにあった藁ですぐに家を建て、次男は木を集め、三男はレンガをもらいに行き、せっせと作りました。長男、次男は家を建て終わってのんびり過ごしていましたが、三男は汗を流しながら一生懸命頑張りました。ある日、長男の家にオオカミがやって来て、家は吹き飛ばされてしまいました。長男は怖いので次男の家に逃げ込みましたが、次男の家もふた吹きで飛ばされてしまいました。二匹は三男の家に逃げました。三男の家は、いくら吹いても飛ばません。オオカミは屋根から入ろうと考えました。三匹は急いで火をおこし、大きな鍋でお湯を沸かしました。そこへオオカミがやって来て、熱湯の中へ入ってしまいました。謝るオオカミを家のあるじである三男が許したので、二人の兄も渋々許し、オオカミは森に帰り、三男の家で三匹は仲良く暮らしました。

三匹の性格と家作りのかかわりも記され、この学生にとってかなり印象に残った話であることが粗筋からくみ取ることが出来る。

「三匹の子ぶた」の骨子として、

- ① 三匹がどんな材料で家を建てたのか
- ② 三匹、家づくり後の展開

③ オオカミ、そして結末部分はどうかの三点を、粗筋を書く際に織り込んでほしいと強調した。

結果、大半の学生（63%）が、三匹ともオオカミに食べられない展開だった。オオカミの死を粗筋とする学生は、33%である。ではイギリスの昔話・原話は、どのように語られているのかである。

次の学生の粗筋も、「三匹の子ぶた」が記憶の中に定着している。

#### 〈事例2・男子学生〉

お母さんぶたから、家を出て力を合わせて暮らすように言われた三匹の子ぶたは、家を建てる場所や家を建てる材料のことで言い争いになり、長男ぶたは丘の下に藁の家を、次男ぶたは丘の途中に木の家を、三男ぶたは丘のてっぺんにレンガの家を建てることにしました。長男、次男のぶたはあっという間に家を建てましたが、三男ぶたはなかなか完成せず、やっとのことで完成しました。そんな時、オオカミが現れて、長男ぶたと次男ぶたの家を襲って壊してしまいました。長男ぶたと次男ぶたは、三男ぶたの家に逃げ込み一安心、しかし、オオカミは煙突を見つけて、そこから入ってこようとしました。三男ぶたは煙突の下で火を焚いて、鍋でお湯を沸かしました。煙突から入ってきたオオカミは、鍋のお湯でやけどをして、あわてて逃げて行きました。それから三匹の子ぶたは、レンガの家で仲良く暮らしました。

すべての学生に乳幼児期に出会った「三匹の子ぶた」を思い起こしてもらった。中には記憶に残ってない学生もいた。

その後、イギリス昔話を絵本化した福音館書店本（瀬田貞二・訳 山田三郎・絵）を語った。絵本『三匹のこぶた』は、現在

- ・幼年教育絵本こどものとも（1960年発行）
- ・市販絵本（1967年発行）
- ・こどものとも劇場、大型絵本（1998年発行）

の三点存在していることを見せ、大型絵本を語った。その観聴きを受け、次のような感想をもらった。

〈事例1〉の学生は、

〈先生が読んだ話も聞いてみると、そういうストー

リーのも読んだことがあるなあ…と思った。でも、親や保護者から、子どもの教育にあまり良くないという意見もあるんだろうなあと思った。違う結末もまた面白い)

〈事例2〉の学生は、

〈私が昔読んだ「三匹の子ぶた」と今回の「三匹の子ぶた」は一緒だったけれど、忘れていた部分もあって、今回改めて聞いて、よく思い出せた。食べられちゃう、ちょっと怖い話と、だれも死なない普通の話があったことを思い出した〉

と感想を記してくれた。また、

〈私は夢かな(「夢をかなえる塾」学生達が将来を展望して行く子ども教育学科独自の試みである。通称「夢かな」と呼ばれている)で以前、「三匹の子ぶた」の指人形をしました。その時皆で話し合っ、最後に煮て食べるのは残酷だから変えようと言って変えました。今回読んでもらってやっぱり残酷だと感じました。なぜ昔話はほとんど終わりが残酷なのだろう…。子どもは怖いのではないだろうか…。でも、人をだましてはいけないとこの本から学ぶのかな…。などと考えながら聴きました〉

〈私が知っている「三匹の子ぶた」とは全く話の内容が違っていた。三匹のうち二匹が死んでしまっていたが、私の知っている話では誰も食べられて死ぬことなく、めでたし、めでたしで終わっていた。(オオカミも死ななかった)でも、幼いころにこの話を読んだときは、「オオカミなんていなくなればいいのに」と感じていたことを思い出した。そのような面を考えると、今日観聴きした本の終わり方も、ありなのではないかなと実感した〉

の感想ももらった。

授業は、その後、〈残酷ゆえに教育上良くないのか〉へと視点を深めて行った。

### 五味太郎・色の絵本6冊から「あおの絵本」を作った

子どもたちへの絵本の語り聴かせには、様々な方法がある。

まずは、子どもたちの興味・関心をとらえ、選書してやることだろう。その際、毎月届く、季節

も踏まえた「月刊保育絵本」も活用したい。そしてもう一つ、保育者が子どもの一年を想定し、一人の絵本作家の作品を読み続けてみる方法もある。

2011年後期「保育内容指導法(言葉)」では、五味太郎を語ることにこだわってみた。

- ・秋の色・「( )の秋」を考える
- ・『あきはいろいろ』を語る
- ・秋の色・茶色から『ちやいろのほん』へ展開
- ・そして黄色も秋の色で『きいろのほん』も語る
- ・『しろのほん』『あかのほん』『くろのほん』、3冊 関連付けながら語る方法の提案
- ・五味太郎・色の絵本6冊、残りは何色かを考えてもらう
- ・一人の学生が〈透明〉ではと指摘してくれたのを受け、『がいこつさん』を語る
- ・『みどりのほん』を語る
- ・最後の一冊は「あおのほん」ではという学生多かった。五味太郎・色の絵本を参考に、世界に一つしかない「あおの絵本」を作ってみた
- ・2011年・卯年最後の授業には、色を意識した絵本『うさぎはやっぱり』を語る
- ・2012年辰年には  
市販絵本『おーいみえるかい』  
大型絵話『おおいみえるかい』  
大型絵本として作られた『グレート・ワンダーシップへようこそ!』  
月刊保育絵本・かがくのとも500号『どこまでゆくのか?』505号『にているね!』  
辰年絵本『なにしているのか?』  
を語り聴かせての授業展開とした。

絵本は、一冊ずつ語るのが基本である。しかしこんな語り方も出来る。そして、このような語り方を試みると、子ども達の持っている違う側面を引き出すことが出来ると信じている。その語り方とは、五味太郎『しろのほん』『あかのほん』『くろのほん』を同時に読み込んでみる方法である。

授業で、三冊同時語りを試みた。ある学生が、〈黒赤白どの色を考えても、2つか3つしか浮かばなかった。みんなの意見を聴いたり、絵本を見たりすると、砂鉄やナナホシテントウムシ、

お婿さん、自分じゃ思いつかない物ばかりで面白かった。これこそ《みんな違ってみんな良い》であり、絵本からそういうことも、子どもたちへ伝えられたらいいなと思った。色の絵本は、今日で三回目だけど、やるたびにもっと自分の感性を豊かにしたいと思う。日頃から色んなものに興味を持てるようにしたい)

また、次のような視点も提示された。

〈この三冊の中で繋がりがあり、すごいと思った。自分ならば、ランダムにキーワードを見せ、これがどの本に出て来たかというのをやってみても、面白いなと思った。でもその時に、子ども達に「これは、この色に見えない！」と言われたら、何と説明すればいいのか戸惑うと思う。作者がこう言ってるから…なんてことは、子どもにも通用しないと思った〉

この学生へは「作者がこう言っているでは、子どもには通用しないよね。どう、自分だったら答えるか、考えてみようね。その子に『では、どんな色かな』と問い返してもいいかもしれないね」と、授業記録に書き添えた。

絵本の語り聴かせには、いろいろな方法がある。子どもたちの状況に合わせて、展開を変化していける引き出しを、四年間で蓄えてほしいものである。

さて青の絵本作りだが、五味太郎6色の絵本を見聞きしたことを活かして、まず青からイメージ出来る11の言葉を上げてみた。学生の青の表現、5点列举してみたい。

- ◆くれよん、そら、ぷーる、ふでばこ、ずぼん、おりがみ、いえ、けいさつのふく、どらえもん、ばす、こっぷ、さかな
- ◆そら、ドラえもん、援(人名)のくるま、グフ、アクエリアス、顔色、青春、あかちゃんのおしり、ガリガリ君、アジシオのキャップ、ビジュアル系バンドの口紅、ちきゅう
- ◆うみ、けしごむ、そら、大野智、くるま、ぼーるぺん、しんごう、ちきゅう、まふらー、健太(人名)のふでばこ、『がいこつさん』のひょうし
- ◆ちきゅう、そら、うみ、あじさい、しんごう、みず、はわいあんぶるー、さみしい心、どらえ

もん、あおな、かんたろうみみず

- ◆うみ、そら、大野くん(嵐→イメージカラーが青)、スティッチ、安田章大(関ジャニ∞)、千賀健永(Kis-My-Ft2)→二人ともイメージカラーが青、デিজィー(花)、さかな、ちきゅう、ペン、えのぐ

学生によって様々である。時代をも感じさせる表現であった。絵本にする際、これらの言葉をどのように並べたら、効果的かも考えて作るよう提案した。すると、手のひらサイズ・紙芝居形式・飛びだす絵本と多種多様な形へと結実した。中には青い画用紙等も用意して制作を始めたが、悩みに悩んだ末にロール状のトイレットペーパーで作るとのアイデアまで出現した。

子ども教育学科二年間での学びが具体化されたように思い、一冊一冊楽しく読んだ次第である。

### 3. 坪田譲治昔話を再評価

昔話の継承と保育実践を具体化する素材として、最後に〈坪田譲治昔話〉から考えてみたい。

坪田譲治・再話『日本むかしばなし』全6巻が、フォア文庫(金の星社)から刊行されている。このシリーズは「本書に収めた昔話は、戦中より昭和三十年代に書かれたものです」とある。1940年から1955年くらいの坪田の仕事である。

6冊それぞれの解説も充実している。解説に沿って、坪田再話姿勢を具体化してみたい。

坪田は、幼少の頃昔話と次のように出会っている。「坪田先生は、幼い頃、毎晩のように、母上から寝物語に、懐かしい昔話を聞いて育てられたといひます。そして、おしまいに、『それ、鐘つき堂の鐘が鳴りだしました。数えてごらん。一つ、二つ…もう九時だから、さあ、寝ましょう、寝ましょう』と言われて寝につく、幸せな幼い頃のことを書かれています。先生は、明治二十三年生まれですから、もう九十年も前のことになります」(水藤春夫・解説)であった。この昔話との出会いの原点を踏まえ「昔話は、それぞれの地域の言葉(方言)で語られ、その言葉の味わいが、しみりと心に伝わってくる。それが昔話の特色といえましょう。それを、どの子どもにも、自分のもの、自分のこととして受けとれる共通語で表

すこと、それは想像する以上に難しいことです。それを成しとげたのは、坪田先生の天性という他はありません」(水藤)と、共通語で昔話を再話する姿勢を指摘している。

この点について竹崎有斐は「坪田譲治昔話を読んでいるうちに、そこにあるのはもう、『だった調』とか『ました調』の違いだけではないのに気がついてきました。言い回しの上手下手の問題を超えて、坪田先生はまず話そのものをしっかり自分の物にしたうえで、自分の語り、つまり自分の文章で書いておられるのが、次第に分かって来ました。自分の文章で書くと言うのは、当たり前のことなのですが、なかなか難しいのです。又自分の文章とはどんなものと聞かれても、すぐには返答できませんが、坪田先生は『ました調は難しいね』と言われた時、先生がご自分の文章と向き合っておられたその厳しさが、若かった私には少しも分かっていなかったのだと、その時つくづく思えてきました」と指摘している。また、西本鶏介は「『むかし、むかし、あるところに、兄と弟がいました。兄のほうは、なまいきで、あまりかしこくないほうでありましたが、弟のほうは、なかなかりこうな人でありました。それで、兄は弟をどこか、おむこさんにやってしまいたいとおもっていましたが、弟は、どうかして、じぶん一本立ちでくらしたい、と考えていました』これは『海の水はなぜからい』の書き出しの所です。とても分かりやすく、なめらかな文章です。最後に『と』や『さ』をつければ昔話風の語り口になると思うのは考えものです。『ですます調』の淡々とした文章で、昔話の素朴な語り口を生かしているのも譲治昔話の特色です。目で読むだけでなく、声に出して読むと、その効果が一層はつきりすると思います」と、共通語での再話にこだわった坪田昔話であることを強調している。

また竹崎は、坪田昔話が成立した背景を「昔話と言えば柳田国男を忘れることはできません。日本民俗学の創始者で、日本各地で伝承されている昔話・伝説を集めて、その地に生き続けてきた人達の心と姿を探ろうとするすぐれた著書が数多くあります。有名な『遠野物語』もその著書の一つです。坪田譲治は、この柳田国男から直接資料の

提供を受けて、昔話を書いたのです。柳田国男はもともと、昔話の再話にはあまり賛成ではありませんでした。それは下手に再話されると、伝承の昔話が壊されると心配されたからでしょう。でも、『子供のために再話をしたい』と言う坪田譲治からの手紙を受取って、あなたならいいでしょうと、昔話の貴重な資料を提供してくださったのです。だから坪田譲治の昔話には、柳田国男と言う一流の学者の裏付けがあるのです」と指摘している。柳田国男の協力あつての坪田昔話の成立は驚きの発見である。

また西本は「昔話を庶民の抵抗の文学として、そのエネルギーのみを言い立てるような書き方になっていません。坪田さんの持つ童話の温かさやユーモアの精神が込められ、口承文芸を見事な文学として甦えらせています。いかに再話と言っても、原話を今日の文章に移し替えるだけでは意味がありません。その昔話が生まれてきた背景やそこに込められた昔の人たちの思いをくみ取る力がなくてはなりません。単なる表現技術でなく昔話への共感と深い理解力が、優れた作品になる秘訣です」と、坪田再話の根本精神を具体化している。

昔話の再話には、

- (1) 昔話の特質の一つ、語り始め・語り納めを、再話の話の導入と結末に用いる。
- (2) 語り口調「～だった」「～とさ」「～げな」を語尾に用いる。
- (3) 方言を尊重した語りとする。

が基本と思っていたのであるが、共通語による坪田譲治昔話を再評価し、今後の再話の在り方を考えていきたい。

#### 4. 終わりに

2011年4月、小学校では新学習指導要領が実施された。国語科では、特に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が設けられた。いわゆる、伝統的な言語文化に関する指導が重視されたのである。一、二年次では「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」とある。つまり「低学年では、まず、読み聞かせを聞くことで、伝統的な言語文化に触れることの楽しさを実感できるようにする



ことが大切である。話の面白さに加え、独特の語り口調や言い回しなどに気付き親しみを感じていくことを重視する。読み聞かせを聞いたり、互いに発表し合ったりすることを求めているので『C読むこと』(2)『イ 物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること』と関連付けて、初歩的な語りや劇、紙芝居などによる発表活動を工夫するようにすると効果的である」としている。

ここでは幼稚園（保育園）と小学校の連続性が見られる。子ども教育学科の学生もこの視点を持ちつつ、自己の感性磨きに努めていくべきである。

今後も、学生と一緒に様々な場面で具現化していくつもりである。

本稿は、その一報告である。

\* 「昔話の継承と保育実践」のための〈注〉

語り聴かせ

一般に絵本の「読み聞かせ」と表現する。読み聞かせを一步深め、語り手は聴き手がしっかり観聴し、同一空間を形成できるような語りを実現する行為。筆者、造語である。

観聴き（みきき）

筆者、造語である。聴き手がじっくりと観察、しっかりと傾聴してもらえる状態をさす。

再話

採話（語り手による音声言語の昔話）を原話として作家自身が再創作・再創造した作品。

亀にまけた兎

「日本昔話大成番号・39 (1)兎が競争で亀に負け、仲間から追放される。狼が兎村に子兎を三匹献上せよと迫る。(2)追放された兎が、狼を欺いて崖から突き落とし、その功によって許される。」

（『日本昔話大成・11』資料篇「一、昔話の型」）昭和6年岩倉市郎が、新潟県南蒲原郡で採集し、昭和7年『加無波良夜譚』（玄久社）へと収めた昔話。

